

自閉症と身体

向井雅明

奇妙な身体的現象がある。

例を挙げると

——イエス・キリストは磔刑の際、手足に釘を打ち付けられ傷を負った。そしてキリストのこの傷跡は、後になって熱心な信者の同じところに浮かび上がることがあり、それには大量の出血を伴うそうである。カトリック教会ではこの現象を「ステイグマータ」と呼ぶ。

——治癒の水、飲めば、病気を治癒すると信じられている水が報告されている。有名なのはルルドの泉である。

——シャーマンやヨガの行者が真つ赤に焼けた炭の上を平気

で歩き足には全くやけどもしない。ローソクの上に手をかざしても何も感じず水ぶくれもしない。

——新興宗教の広告にはよく難病も治ったとうたっている。

——手のひらをかざすだけで病気を治すという療法。気功。整体。

——感覚は有るのだが身体に傷を付けられても全く動じない態度を示す人。「心頭滅却すれば火もまた涼し」快川禪師

これらの現象にはかなり疑わしいものも多く、一般的にあまり信用はされていないことであるが、信頼するに足る証言も少なからずあるので、全く根拠のない現象ではないように思われる。実際に起こることだとするとそこには何らかの説明が成り立つはずだ。精神分析的観点からこれはどのように説明でき

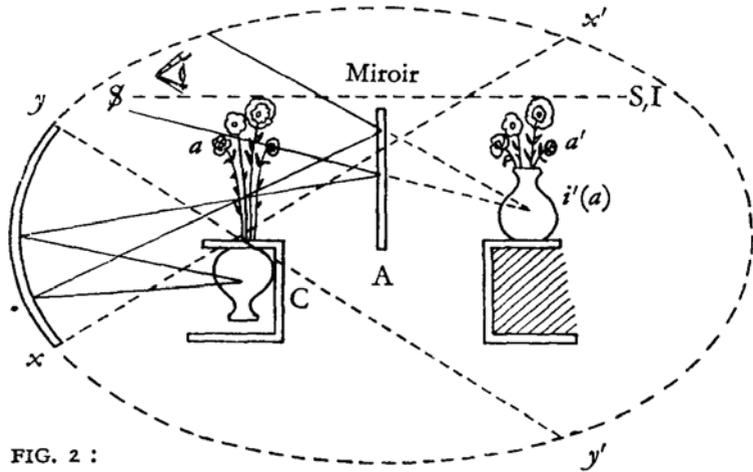


FIG. 2 :

図 1

るだろうか。

身体現象を扱うのであるからまず身体とは何かを考える必要がある。人間にとって身体は動物の体とは同一に扱うことではきない。動物においては体は動物自身であり人間における精神と身体の乖離のようなものはない。他方、人間にとって身体とは構築されなければならないものだ。身体というものはいかに構築されるかのだろうか。人間にとって身体はイメージと強く結びついている。ラカンの有名な鏡像段階はその身体の最初の構築の契機である。それを簡単に説明すると、生まれてくる子供は自分の身体にたいしてばらばらなイメージしか持つておらず、鏡の前で初めて自分の身体を統一した全体像だと認めるといふものであった。鏡のなかの自らのイメージに同一化することによって統一した身体像を獲得するのだ。

ラカンはこの鏡像段階を説明するために光学的図式と言われ一つの図を構築した。

この図は平面鏡と凹面鏡の二つの鏡と、花束、そして花瓶と花瓶を隠す一方だけ開いた箱から構成されている。

それぞれの構成要因の役割はつぎの通りだ

——花束は子どもにとってのばらばらな身体イメージ

花瓶は花束の下に置かれた箱のなかに隠され、子どもは直接見ることはできない。

——凹面鏡は、花束の右に位置する人の目に対して箱の中の花瓶を実像として浮かび上がらせる。見る人にはちょうど花束

が花瓶のなかに収まるように実像が浮かび上がる。

花東が花瓶に収まるイメージは分断された身体像が一つにまとまり統一した身体像が得られることを意味している。

——平面鏡：凹面鏡だけでも身体の統一像は成立するのだが、ラカンはこれにもう一つの鏡を付け加え、それを大文字のAとして記す。Aは言語の他者を表すもので人間は直接自らの身体統一像を見ることはできず、常に言語を通してのみ自分の身体を把握できるのだということの意味している。

ここで注目すべきは鏡の右側に置かれた大文字のIの置かれた場所、見る人の目はここに観点を据えられて初めて自らの身体イメージを見ることができ。分析用語ではこの点を自我理想と言い、人間は常にこの点に立って世界を見ているのである。この点が失われると人は自分を見失ってしまう。

この平面鏡Aについてはラカンもはっきりとした説明をあたえていたのにならして、凹面鏡についてはほとんど何も説明がない。わずかに冗談めいてこれは大脳皮質だとも言っているが、まともにとつてはいけなとも言っている。そんなわけでラカニアンの間でもこれに特別に気を配る人はいなかった。

ところがこれについて興味深い意見を述べている人がいる。アンリ・レフフロという分析家である。彼は自閉症について最近一冊の本を出したが、その中で自閉症についてかなり掘り下げた考察を展開し、自閉症を説明するために凹面鏡の図を持ち出す。本講演は彼の本に基づいている。

彼の心的装置の理論をまず見てみよう。
彼はフロイトのフリースへの手紙52番を参照しながらどのように心的装置が構築されていくかを捉えようとする。

図2

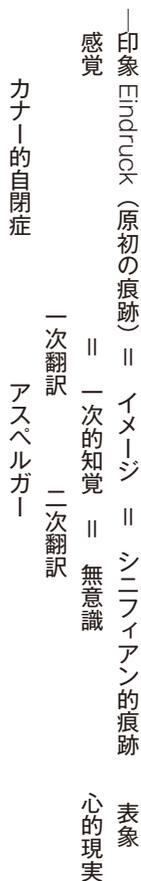
知覚	覚S	無意識	前意識	意識
x x	x x x	x x x	x x x x	x x x
x	x	x x	x	x
x	x x	x	x	x
x	x	x	x	x

この図は主体が外部からの刺激を受け取ったあと、その痕跡がどのような翻訳されていくかを辿っている。

フロイトはこれらの段階のそれぞれにおいて問題が生じ固着が発生するとそれはその段階に応じた病理が発生すると考えていた。これにたいしてレフフロは次のような図式を対応させる。

図3を説明しよう

——われわれが外世界から受ける刺激は感覚としてまず受け止められる。この状況では感覚は無差別状態にあり、世界は無秩序な混乱のなかにある。この状態では個別の認識は不可能である。



— 次に、最初の印象はイメージとして個別化される、ここではイメージによる思考が可能である。自閉症者は抽象的な概念を理解することができない。たとえば平和という概念を鳩で表すなどイメージにむすびつけて考える。ここには可逆性があり、それほど堅固な翻訳ではない。

— その次の段階では、イメージ同士が結びつき合ってシニフィアンとして作用するようになる。ここで無意識が成立する。その結果意識的表象が可能になる。この翻訳作業はラカンの言えば父性隠喩が作用する場所である。世界はファルス化され、男女の差を考えることも可能になる。以後われわれの一般的な知覚の世界成立し、通常の認識がなされるようになる。

ここで重要なのは感覚と知覚を異なったものとして扱っていいこと。感覚は受動的なものでわれわれは単にそれを選択せず

に受け取るだけなのに比べて、知覚は能動的で選択的。知覚があつて初めて私たちは何かを差異的、具体的に感じることができる。それにたいして感覚は非差異的。感覚の世界は混乱しており構造化されていらない。

音に関して言えば、音を感じただけで聞くと世界は様々な騒音に満ちあふれている。知覚はフィルターを通すので静かな世界が可能となる。耳は閉じられないが知覚としての耳は閉じることができる。私たちの耳は聞かないためにある。

視覚にかんして世界は感覚だけでは平面的なイメージしか得られないのに対して知覚では奥行きが感じられるようになる。

この図式で注目すべき点は、私たちが通常の知覚を獲得したり、シニフィアンを使用して言語的表象行うことができたりするようになるには、ばらばらの印象から一つのまとまったイメージへの移行と、イメージからシニフィアンの構造化への移行という二つの翻訳過程、二つの契機を経なければならぬという論理だ。一般的にラカン理論では二番目の移行に相当する原抑圧、もしくは父性隠喩的作用による世界のファルス化という唯一の過程のみで心的装置の成立をかんがえる傾向にあるが、

たとえば精神病を父の名の排除という機制だけで捉えることは、精神病者においても言語による構造化はなされているという事実をはつきりと捉えられなくなってしまう。心的装置の成立過程に二つの大きな契機があるとかんがえると、主体的構造の把握がより合理的に行われるように思われる。

再び先ほどの鏡の図に戻る。

図1を構成している二つの鏡は今述べた二つの契機に相応していると考え、この図を大変スマートに説明ができるようになる。レフフロは次のように考える。

すなわち、最初の翻訳は凹面鏡に相当し、二番目の翻訳は平面鏡に相当すると見なすのである。平面鏡は言語を意味するものであり、それが導入されるとわれわれは言語を通して世界を見るようになるということ、これはすでによく知られている図式なので説明は省く。

凹面鏡に考察を移そう。凹面鏡によってばらばらな感覚がまとまったイメージになると言うことであるが、具体的には何を指すのだろうか。

レフフロはここでウイニコットを参照する。ウイニコットは子どもが正常に育つためには、母親が乳児にたいしてホールディング、「抱えること」を行うことが必要だとかんがえる。ホ

ールディングとは精神的、肉体的に母親が子どもを抱え、受け止めてやることである。全く無力の幼児はまだ感覚運動的にもばらばらで統一された自己というものができていない。こうした状態の幼児に統一した自己を確立させるのを助けるのがホールディングである。言い換えると、母親が子どもにとって鏡となり子どもに自己の統一像を見せてやることに相当する。

すなわち凹面鏡は子どもを前にホールディングを行う母親を表しているのだ。

平面鏡が言語を表す鏡であるからサンボリックな次元のものであるのたいして、凹面鏡はイメージとしての統一をもたらすという意味でイメージな次元に属すとかんがえて良いであろう。人間はこのようにイメージな鏡とサンボリックな鏡を通して感覚を構造化した結果知覚するのである。それぞれの鏡の位置について、凹面鏡は印象とイメージの間、第一の翻訳の場、平面鏡はイメージとシニフィアンの痕跡の間、第二の翻訳の場に置かれる。

光学的図式を持ち出してきたのは、自閉症の特殊な世界を説明するためであった。外部と全く接触を持とうとしない自閉の様態を示す子ども達はそれまで分裂症と同じカテゴリーに入れられていたのが一九四三年にレオ・カナが自閉症として独自の疾患単位として認めたのが最初であった。そして一九四四年

にはハンス・アスペルガーが高機能自閉症とも呼ばれるアスペルガー症候群を報告した。これは知能的にはあまり障害の認められない自閉症を指している。それぞれの自閉症を上の方に位置するとカナリーの自閉症は第一の翻訳の前、アスペルガー的自閉症は第一の翻訳と第二の翻訳の間に位置される。

ここで簡単に心的装置の構築過程での自閉症の位置づけをおわり、身体問題に入っていきたい。

自閉症児は外界からの刺激に対して普通の子どもには見られないような特殊な反応を見ることがある。たとえば、痛みを感じなかつたり、ローソクの上に手をかざしても平気で、手やけどさえしなかつたりなどである。これは一般的に自閉症では、音や匂い、手触り、痛みなどの感覚を大脳で正しく情報処理できず、異常な反応を見せるのだということで説明されるようだ。しかし、脳の異常というという説明はわかりやすいが、じっさいは説明にはなっていない。

これまでの説明で明らかになったことをもとに説明を試みる。

人間にとって痛みというのは客観的に作用するものではない。状況に応じて同じ怪我でも感じ方が変わる。たとえば注射をすると言われたあとに注射をされると大変に痛く感じるが、地震とか火事にあつてパニック状態に陥ると、かなり大きな怪我也も痛みを感じないし、怪我をしたことさえ気がつかない。こ

のような経験は誰にでもある。すなわち客観的に感覚はあるはずなのだが、それを知覚としては感じないのだ。すでに感覚と知覚は違うと述べた。感覚が知覚になつて初めてわれわれは意識的に何かを感じるようになる。心的装置の上で言うとき一次翻訳がなされなければならないのだ。

もう一つ興味深い例がある。モルヒネは痛み止めとして末期癌の患者によく使われる。モルヒネは痛みの伝達を遮つて鎮痛効果を与えるとされる。しかしモルヒネは、実際は痛みを麻痺させるのではなく、逆に麻薬効果によつて知覚のフィルターを弱め、原始的な感覚を増大させて痛みの知覚を無差別的な感覚の中におぼれさせてしまうのだ。

このように感覚と知覚の違いを認めると、カナリーの自閉症者が痛みに鈍感である理由が単なる大脳の障害という説明に頼らず理解できるようになる。つまりカナリーの自閉症においては痛みを知覚として構成する心的装置が十分に構築されていないと理解すべきだ。

では、火に手をかざしてもやけどをしないというのはどのように説明すればよいか。やけどは生理的、物理的な現象のように思えるのだが、どうして自閉症者はやけどをしないのであるのか。

やけどとは何であろうか。やけどすると赤くなつたり、水ぶくれができてたりする。これらの反応はやけどから直接生まれる

のではなく、じつはやけどの知覚に対する自律神経系（交感神経、副交感神経）の反応により白血球とカリウム液、体液が動員される結果である。死んだ動物を焼いてもやけどにはならない。また生体はほとんど水分から構成されているので多少ローソクに手をかざしたところで焦げることはない。紙で作った容器に水を入れても燃えないのと同じだ。ここでは高温の感覚はあっても熱いという知覚はないので自律神経が反応せず、火傷の症状が生じないのだ。

これが単なる高温の感覚への反応ではなく、熱いという知覚へ自律神経の反応であるということは別の経験からも推論することができる。催眠術である。催眠術では術師が被験者に催眠状態で「あなたは今やけどをしている」と言うだけで、実際に被験者には水ぶくれなどのやけどの症状ができる。

ここでは自閉症における状況と逆の状況が再現されている。自閉症ではやけどをしたという知覚がないので情報が自律神経系に達せずに症状が生じないのに対して、催眠では言語による偽の情報が自律神経系に作用してやけどの症状が生まれると考えられる。つまり言語による情報は知覚による情報と同じ作用を生み出すのだ。

図4

実際の火傷の場合

(火) 感覚—知覚—自律神経—生体反応(火傷)

自閉症、火の情報はあがるが知覚に伝達されない場合

(火) 感覚—×××—知覚—自律神経—生体反応なし

言葉による偽の情報

感覚—知覚—×××—催眠—自律神経—生体反応(火傷)

今説明のために催眠術の作用を援用したが、催眠についても一言触れておく必要がある。痛みを止めるための麻酔の役割を果たすものとして催眠麻酔法というのがあり催眠は痛みの知覚を止める一つの方法でもある。この催眠と自閉症の痛みにたいする無反応との間に何らかの関係を認めることができるであろうか。

催眠は暗示の最も純粋な形態を示すもので、フロイトは次のような図を使って説明しようとした。

この図についてはラカンがセミネールの第11巻で解説している。ラカンによると催眠術は自我理想を対象が重なりあう時に効力を発する。自我理想はすでに出てきた概念で、これは自我に対して支配的な立場をとる審級である。自我理想は通常、対

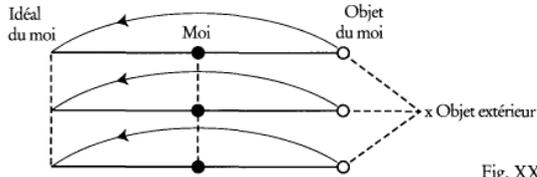


Fig. XX-2

図 5

のだ。ところが、ラカンの説明はここまでで、両者の混同により催眠がかかる理由は説明されていない。そして催眠の仕組みは不透明のままに残っている。

レフロはここで催眠を自閉症と結びつける。

象とは分離されているものであるが、催眠においては対象と重なり同じ位置におかれるようになる。ラカンはここにおける対象を自らの考案した対象 a に対応するもの

と考える。催眠術でガラスの玉を見せたり、術師の目を見せたりするとき、そこにはまなざしとしての対象 a があると考えられる。そして術師の声も対象 a としての声として作用する。さらに催眠術をかけられる状況において術師は常に何か特殊な力を持った支配的な立場に置かれる。すなわち自我理想の場所に置かれるのだ。同時にまなざし、声といった対象 a がそこで作用し、自我理想と対象 a の混同がなされ催眠作用をうみだす

自閉症はどのような主体的立場を表すのか。精神分析理論の前提として、私たちは生まれてきて「他者」の世界に入ることによって何かを失うというのがである。フロイトはこれを失われた対象と呼び、ラカンは対象 a と呼ぶ。

この対象喪失を前にして、自閉症は対象の喪失を否認することによって対象を失う以前の状態にとどまろうとする主体的立場である。ラカンの言う疎外における最初の「存在か意味か」という選択において存在を取るという態度である。その結果、言語世界にうまく入ることができず、言語の入り口にとどまることを余儀なくされるのであった。ここでは対象の喪失は受け入れられず、対象と自我理想との分離がなされず、自閉症者は無差別的な感覚の世界に残るのである。

レフロは、催眠によってもそれと類似した状況が生まれるのだと考える。対象と自我理想が融合し、人為的な原初的快感自我が構成されるのだ。このとき術師は被験者にとって自分を対象喪失から護ってくれる支配者の立場に置かれる。原初的快感自我に成立により知覚が失われ、生体の防御機制である自律神経系を動かすことのできる知覚の代わりに術師の言葉が置かれると考えられる。その結果上で述べたような催眠術によるやけどの症状の創出が可能になる。

したがって、催眠の効果は、自我理想と対象の融合による原初的快感自我の成立によって知覚が術者の場所からくる言葉だ

けに狭搾されることによる。そしてその効果は被験者が術者を信じ込む度合いが強いほど大きなものとなる。したがって催眠において、通常は自律神経に生体の保護のための情報を送るための知覚が占める場所に、術者の言葉が置かれる。それ故に術者の言葉だけで火傷の症状が生まれるのだ。

このような作用は催眠以外で認めることができる。宗教的な奇跡たとえばルルドの泉の水によつて病気が直るなどは、直接に催眠をかける術者はいないのだが、その代わりにキリストとかマリアへの信仰が作用する。自分が信じるものが自我理想の場所におかれて自己催眠状態が生じ、そこから聖痕が身体に現れるとか、病気が治るとなどの「宗教的奇跡現象」が生まれるのだ。信じる者は救われるというが、確かに信心が強いほどこのような暗示現象にかかりやすくなるだろうから、宗教によつて身体的な問題さえも解決できる可能性があり、救われるのだ。

言葉と身体の接点がここに認められる。デカルトの松果体は精神と身体の接点であったがここではそれは自我理想の占める

位置である。自我理想はゆえに心身問題において重要な役割を示していることがわかる。

暗示療法は心理療法で使われる手段であるが、精神分析において暗示は最大限に回避される。そうすると精神分析においては身体的症状の変化は見られないとみるべきであろうか。しかし精神分析においても身体的症状の変化はしばしばみられる。それは暗示効果によるものではなく、精神分析は自我理想、ラカンの言葉で言えばS1を変化させるものであるゆえに当然身体に様々な影響を与えるのだ。

この心身問題は現在まではつきりと解明されてきたことはなかったがこの説明はその点画的なものだと思える。もちろんすべてが説明されたわけではないが心身問題を解明するためのひとつの強力な道が見えてくるように思える。ここでは展開できないが、最終的にこの問題はエクリチュールの問題に繋がっているはずである。現代の科学的な医学ではみることができないロジックがここにある。